

第15回 経験交流会（よりよい授業を求めて）

2014年10月29日（水）15：00～16：30（於：中京大学ヤマテホール）
中京大学国際教養学部・教育事業推進委員会主催、中京大学FD委員会後援

「大学における研究と教育の接点」

司会：太田めぐみ（国際教養学部准教授）

話題提供：明木 茂夫（国際教養学部教授）

渋谷 努（国際教養学部准教授）

野村 昌司（国際教養学部准教授）

瀧 剛志（工学部教授）

国際教養学部長挨拶：杉江 修治

司会（太田）：

よろしくお願いします。この経験交流会は、国際教養学部の前身である教養部の時代に、教員間で授業の経験を紹介し合って、よりよい授業を目指していこうということで始められたと聞いています。現在は、国際教養学部教育事業推進委員会が主催して大学のFD委員会からも後援をいただく形で開催されています。本日、司会を担当致します太田めぐみです。例年、教育事業推進委員会の委員長が司会をすることになっているようです。不慣れではありますが、よろしくお願い致します。

今回の経験交流会は、研究と教育の接点というテーマで行うことになりました。大学教員の役割とは何か、あるいは大学教員に求められているものは何かと問われたとき、研究と教育と答えることになるかと思うのですが、とはいえ半期15回の授業を行う上で自分の研究と授業の内容が100パーセント合致するというようなことはなかなかないのではないかと思います。つまり、研究と教育をどのように結びつけていくのか、あるいは、結びつけるための工夫をどうするのか、あるいは、得られた最新の知見をどのように授業に活かしていくのか、そういったことは、我々教員が考えていかなければいけない事柄になるのだと思っています。教育事業推進委員会の中でそのような話が出まして、ではこのテーマで行きましょうということになりました。今日は4人の先生方に話題を提供していただくことになりました。研究と教育をどのように結びつけているのか、どういう工夫をなさっているのか、あるいは課題であるとか、成功例、失敗例であるとか、色々話題を提供していただくことになるかと思います。先生方のお話が終わった後に、時間を取って質疑応答、意見交換をしたいと思いますので、是非、フロアからも活発に参加していただければと思います。4人の先生方に話題提供をしていただく前に、学部長の杉江先生から一言ご挨拶をいただきたいと思っています。よろしくお願いします。

杉江学部長：

今日のテーマはいいなと思いました。大学における研究と教育の接点というのですから。ただ、もう少し踏み込んでほしいと感じたところがあります。接点って1か所しかくっついてないですね。リンクさせるために交点が2つあってもいいんじゃないかと思いました。もちろん今日はそういう中身になると思います。

先ほど、キャリアセンターに行ってキャリア・ディベロプメントの授業の成果の報告を、担当している業者から聞きました。その際、私は勝手なことをいろいろ言ったのですが、そのうちの1つは学生の授業への要望ということについてです。業者の方は、学生がもっと面接の技術等を入れてほしいと言っているのにそれに応えなくてはいけないかなといった趣旨の発言をしたものですから、私は、「教育の内容は素人の要望で組み立てていいの?」と言ったんです。ちょっと言い方は悪いのですが、学生は学問に関しては素人なんです。何を学ぶべきかはプロの教師が組み立てるべき課題です。授業の進め方に関しては学生の要望にも一理あるところがあるかもしれませんが、学生主体の授業とはいうものの、学習活動において主体であっても、授業の組み立ては教員の側に主導権があるはずで

す。

大学において教育は重要な機能であることは述べるまでもありません。しかし、教員の研究が、中身および方法という面で、しっかり背景になくはいけません。それがあってこそ、何を教えるかという教員の主導性も発揮できると考えます。

私は図らずも今年から学部長をさせられているのですが、教育が強調されることが多いと感じられる風潮の中、国際教養学部の教員の研究環境を良くしていくことが自分の重要なテーマではないかと思っています。研究と教育にさく時間や精力とのバランスが大事だと思います。また、今、事務組織の改編が進みつつありますが、教員の事務負担を増やすなどということはあってはならないとも思っています。中学校や高校では授業より部活に頑張っている先生が結構いるように思います。このアンバランスは問題です。大学でも研究と教育のバランスと連関が大事だと思います。

今日は、研究的にも頑張っておられる方々が話題提供をしてくださいます。いいお話を伺えると思います。フロアの皆さんも積極的に参加いただき、有意義な会にしていきたいと思います。

司会：

ありがとうございました。それでは、4人の先生方にお1人15分程度を目安にお話ししていただき、60分、最後30分くらいを質疑応答の時間にとるという形で進めたいと思います。最初に話題を提供していただきますのは、明木茂夫先生です。中国古典楽理や中国語学がご専門で、全学共通の異文化研究や中国語、国際教養学部の中国語、文学部の中国文学などの授業をご担当されています。では、明木先生、よろしくお願い致します。

明木：

国際教養学部中国語担当の明木です。今日は前座ということで、他の先生方が何をお話

しになるか分からないものですから、私からはまず適当にお話ししたいと思います。私が本来の自分の専門としていますのは、先ほどご紹介いただきましたように、中国の古典楽理で、要するに中国古典の音楽理論ということです。音楽学会の人は漢文が読めない、漢文の人は音楽理論が分からない。それでやってみようと思いました。実は、この中国の音階学につきましては、私は日本の第一人者なんです。なぜかと言うと、他に誰もやっていないからです（笑）。と言っていたら、最近若い人でやり始める人が出てきて、このギャグが使えなくなってしまいました。けれども私が始めた当時は、学会で発表しても誰も分かってくれなかったのに、今は質疑応答がちゃんと成立するようになってきました。

ここに持って来ましたのは、今私が取り組んでいる南宋時代の『詞源』という本です。もうぼろぼろになったので、厚紙でカバーをつけています。これは活字本で、他に版本や写本がたくさんあります。本文は漢文ですが、いずれにもこういった図が入ってるんですね。これは何の図かと言いますと、下の音から計算によって1オクターブの12の音階を定めていく、それを図示したものです。それからこれは、天文学と暦との関わりで、その12の音階をカレンダーの12の月に当てはめ、陰陽五行的に解釈していくものです。皆さんご存知のように、音階はドレミファソラシドレミ…と循環しますから、それを円にして、その相互の関係を図示する、ということをやっています。ところが、これを授業にどう活かすかとなると非常に難しい。例えば、これ、私が常に持ち歩いているんですが、「律呂スケール」といって、厚紙で作った定規みたいなものです。こちら側がピアノで言えば「ツェー・デー・エー・エフ・ゲー・アー・ハー」の音名、つまり絶対音高です。こちら側が、「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド」の階名、つまり相対音程で、この2つをいろいろ組み合わせると、西洋音楽で言うハ長調だのト長調だの、という音階の配置が決まるんです。これが転調すると非常に複雑なことになって、中国音階は西洋音階と全然違うんですね、理論が。ですから、えーっと待てよ、これがこう転調するとなぜ何々調になるんだろう、というようなことを、このスケールを常に手元に置いてやっております。この研究は人間が全然出てこないんです。実はこれが、パズルを解くみたいで非常に楽しい。

ところがこれを授業に、となりますとなかなか難しい。以前やったことはあるんですよ。東洋と西洋の数字とか数列とかいう話で。まず、漢数字の一二三四がどうして数字を表すのか。三までは棒の数で、でも四からは棒ではありませんね。漢数字とは、どういう仕組みで数を表すのか。それから、甲乙丙丁…の十干、子丑寅卯辰巳…の十二支、それから方角の十二方位、それから天文学の黄道十二宮など。そういったものを解説する中で、十二音階っていうのも入れたことはあるんですが、学生からは難しいという感想がありました。基本的に絶対音高と相対音程の組み合わせで調が出来るんだよ、というところまでは理解できるのですが、そこから先はさすがに特殊な分野ですから難しい。

他に、中国文学の授業ではこんな資料も使いました。江戸時代の日本に伝わった「明清楽」という中国音楽の楽譜です。今、洋楽がもてはやされるように、江戸時代では、中国の歌が流行ったらしいんですね。名古屋でも演奏されていたようです。その楽譜を見ると、ここに漢字で歌詞が書いてあって、その横に音符が書いてあるんですね。この音符を読み取ると旋律になるんです。他にもいろんな漢詩に音符がついていますので、中国文学

の授業ではその漢詩を普通の授業のように読んだ後に、当時はこんな風に歌っていたんだよと曲を聞かせる。CDがあればCDを聞かせますが、なければ仕方なく私が歌うということで。文人にとって漢詩とは、文学であるだけでなく、音楽の活動にも関係していたんだと、そういう話を文学史の中で取り入れています。こちらは、受けがよいようです。これは私の本来の専門から学生向けの授業への展開、という1つの例ということになりますか。

今の例は、ある意味、一方通行的なんですね。私が勉強していることを学生に紹介するという形です。一方、自分の興味のおもむくままにいろいろやっていたら、それがいつの間にか授業でもネタとして使えるようになった、しかも結果的に双方向的になった、というものも幾つかあります。その1つが漫画翻訳論です。

例えば、今日持ってまいりましたのが『ワンピース』です。これが台湾版と大陸版の中国語翻訳です。それからこれが英語版。そしてなんとこれがロシア語版です。他にもドイツ語版とかフランス語版もあります。これなど、うちの国際教養学部の学生にちょうどよい教材になります。英語以外にもう1つ他の外国語をやっていますから。中国語学科の学生には、中国語版を気軽にどんどん速読で読ませることが出来ます。また学部の固有科目ですと、他の外国語の学生もいますから、この部分どう訳しているか、フランス語の人お願いね、ドイツ語の人お願いね、スペイン語の人お願いね、と説明してもらったりも出来ます。漫画というのはなかなか使える教材だと言えます。

例えば、1つ例を示しますと、バギー船長というのが出てきましてね。これがすごく残酷な人間で、腹を立てるとすぐに部下を殺してしまう。彼は鼻が真っ赤で大きくて、それをすごく気にしているので、鼻のことを言われると、ぶち切れて相手を殺してしまう。そこでこのセリフです。グランドラインへ行くための海図が盗まれた、そして、

「それが船長、ほんの手違いで、海図を保管していた小屋の鍵が、つけっぱなしに…!!」

「何だと…!？」

「ですからつけっぱなしに…」

「誰がつけっ鼻だァ!!!」

「ええ!!？」

で、たちまち殺してしまう。これを外国語にどうやって訳すんですか？（会場笑）「つけっ放し」と「つけっ鼻」の駄洒落でしょう。これを訳すのは大変なんですね。大陸版中国語訳は訳になっていません。「鍵がさしたままでした。」「誰が付け鼻だ？」これ、中国語では発音が違いますから、中国の読者がこれを読んでも、なぜバギー船長が怒ったのか分からない。台湾版中国語訳は枠外に注釈をつけています。私はロシア語は分からないので、会場にニーナ先生がおられますから後で読んでいただこうと思います（ペトリシェヴァ：はい、ぜひ見せて下さい！）。

一方、英語版はと言いますと、

“The key to the map room got left in the lock. And only the robber knows…”

“What did you say!?”

“I said robber knows…”

“What? Rubber Nose??”

“Yikes!”

となっています。海図の行方はOnly the robber knows = 「泥棒しか知らない。」そしてバギー船長が聞き間違えて、Rubber Nose = 「ゴムの鼻」だと言われたと怒る。非常にうまい。もちろんいつもこんなにうまく行くとはいりませんが、こういう風に工夫して訳しているところがある、そこに気づかせると、学生は非常に興味を持ってくれます。

結局、私がここで何を主張したいかと言うと、先生方は先刻ご承知と思いますが、翻訳というのは、言葉の置き換えで済むものではない。漫画は笑えるように訳さなくてはいけないし、電化製品の説明書はちゃんとそれが使えるように訳さなくてはいけない。そういうことがありますし、また翻訳と言うのは文化ということまではみ出すようないろいろな要素が絡むと、そういったことです。そんなことをやっていると、学生の方からも、こんな駄洒落だらけの漫画がありますよ、これは百人一首の競技カルタがテーマになっているので翻訳が難しそうですよ、これの英語訳はあるんですか、このアニメの外国語吹き替えってあるんですか、と、だんだん双方向になってくるんです。漫画やアニメですと学生の方が詳しいので、こっちも勉強して、その中国語版と英語版とを手に入れておく。科研費で買っておくから見に来てね、ということになってきます。だから、すみません、私、楽しみでやっているの、あまり学問ではありません（笑）。そんな風に学生とわいわいやった成果を小冊子にまとめておまして、今11巻まで来ました。コミケなどに出品しておりますが、残部がありますから、よろしければ差し上げますよ。

他にも、私の専門と学生との双方向的なことというテーマでは、UFOの話があります。突飛なようですが、UFOに乗って宇宙人が地球に来ているというような与太話がありますよね。日本では定番ネタと言うか、むしろ既に飽きられてしまっていますが、これが中国で非常に流行っています。この間、ロシアでも目撃されてましたね。中国ではすごく流行って、本もいろいろ出ていますし、ネットでもしばしば話題になります。その1つがこれ。台湾のUFO研究サイトに載ってたものをプリントアウトしてきました。台湾で目撃された空飛ぶ円盤だそうで、下の方から何やらジェット噴射のような炎が出ている。だけどこれ、不鮮明ながら、上昇中の飛行機を後方から見上げているように見えるんですね。学生と「これ絶対飛行機だよ」と話しつつ、ではどのように調査すればよいか相談したんです。飛行機がこの角度から見えるというのは、離陸直後、あるいは着陸進入中のはず。高空を水平飛行中だとこのようには見えません。そこで、目撃された場所の近くに空港がないかグーグルマップで調べる、ということをやりました。こういうことは学生の方が得意です。そして、割と近くに空港があるということを見つけました。旅客機が発着する大きな空港です。やったーと、学生とガッツポーズをしました。やはり、これは空飛ぶ円盤などではなく、飛行機である可能性が高いということになったわけです。

次は、ちょっと私の自慢なんですが、中国の通説をぶっ潰した例です。これは清朝の末期に出版された絵入りの新聞です。もちろん、オカルトだけじゃありませんよ。戦争とか事件など様々なニュースも載り、娯楽記事も載っている、「画報」と呼ばれたりトグラフ印刷による雑誌です。この絵を見ますと、大勢の人が空を指さしながら、あれは何だと騒

いでいる。そしてその向こうの空には、何やら光を放つ小さな点が描かれている。中国ではこれが、中国に昔からUFOが来ていた素晴らしい動かぬ証拠だ、ということになってしまっているんです。私はこれを授業でとり上げて、まず、ここの漢文の記事本文をちゃんと文字に起こして、漢文訓読して現代語訳しました。漢文はやはりみんな嫌がるものですが、その嫌な漢文でもこの場合は別なんです。事が事ですからですから（笑）面白いんです。そして漢字・漢文というのをこれで勉強させた上でですね、なんとか科学的に解釈できないかみんなで考えるわけです。この図を拡大すると、分かるかな…、ここに「九月二十八日晚間八点鐘時」と書いてある。つまり時刻は「九月二十八日の夜八時」です。これ、新聞記事ですから、何年ということはすぐ分かる。それから、場所は「金陵」、つまり今の「南京」です。方角は、ここに「南」だと書いてある。いかがですか？ これだけのデータがあれば、プラネタリウムや天文ソフトでこの場所のこの時間の空の天体配置が再現できますよね。さて、やってみますと、まさにこの時間この方角にある星がぼんやり見えていたことが分かりました。「木星」です。木星はご存知のように、非常に明るく見えます。現在でも、木星を含む宵の明星など惑星の光を超自然的なものと誤認する事件は、しばしば起こっています。こんなことをやっていると、そのうち学生が「こんなニュースがありましたよ」とか「こんな本がありましたよ」と、私に教えてくれたりします。学生といっしょにそれをまた徹底的に調査して、授業に還元したりもします。中国古典音楽と違って、こっちは双方向になってくるのがちょっと楽しいところなんです。

最近、私、こういう本を出させてもらいました。『中国地名カタカナ表記の研究－教科書・地図帳・そして国語審議会』。中国の地名は、他の西洋語圏の地名などと同じように、漢字で書かずに、現地発音式のカタカナで書くべきだということが言われておりまして、これが教科書や地図帳にまで及んでいるんですが、ご存知でしょうか。例えば、これは皆さんよくご存知の、帝国書院から出ている地理の教科書ですが、ご覧のように漢字が書いてありません。「ウーハン」「チョンチン」「テンチン」「チョンチョウ」というように、現地発音のカタカナだけで書くというのが教科書では主流になっている。他の出版社の教科書・地図帳も全部そうです。現地の発音の通りに書くのがいいんだと、それは分かりますが、だけど実際に、例えば春休みにどこ行くのと尋ねられて私が「シーアンからランチョウとチウチュワンを通してツンホワンまで行ってモーカオ窟を見てこようと思います」と答えたら、皆さんどこだか分かりますか？ これを生徒たちに教えてよいものかと。ところが教科書はこうなっちゃってるんですね。

では誰がいつ何のためにこれを始めたのか。いろいろ調べた結果、その元凶は国語審議会であることが分かりました。さらに、国語審議会の動きには戦前から繋がる根っこがありました。そういうことを徹底的に、国語審議会の議事録を含めていろいろ調べて書いたのがこの本です。図書館にありますからぜひご覧下さい。この漢字表記の問題を、漢字の歴史の中に位置づけて授業でとり上げた際、みんなが高校の時や中学の時はどうだった？ と学生に尋ねました。そしたら、いろいろ有益な情報が集まるんですね。結論から言うと、今のところこれで習ったという学生はほとんどいません。なのに教科書はカタカナになっている。一方、カタカナを丸覚えさせられて苦労した学生も少数いる。

教科書だけではなく地図帳も、中国のページはカタカナだらけです。ほら、ホーナン・シャンシー・シェンシーとカタカナでしょう？ この書き方のまま読んで中国人には通じませんし、そればかりか、中国語が出来る日本人である私でもどこのことだか分かりません。これは昭和二十五年の帝国書院の古い地図ですが、ここを見ますと、お分かりになりますでしょうか、韓国が「ハヌ民国」になっているんですね。「大韓民国」じゃなくて「ハヌ民国」です。そんな言い方、今はもちろんないわけですが、この時代はこのような「進歩的」な表記を作って悦に入っていた。とにかく漢字を排除してカタカナにするという嵐のような風潮、政治的イデオロギーがあったようなのです。それが現在の教科書にも影響を与えている。こういうことをとり上げていると、「私がアルバイトで塾講師をした時に、塾の問題集もカタカナ中国地名になってましたよ」と学生が私のところに持って来てくれるんですね。「中学生の妹の夏休みの宿題帳がこうなっていました」、とか。おかげで私にとって有益な資料が増えることになります。要するに、今お話しした漫画・UFO・カタカナ地名という三つは、大変ありがたいことに、学生との相互関係のおかげで私自身の研究も進んだ、という例だと言えると思います。本当に、いろいろな学部がある総合大学にいてよかったなと思っているところです。私からは以上です。

司会：

ありがとうございました。まだまだお話ししたいことがあるのではないかと思いますので、短い時間で申し訳ありません。次は、渋谷努先生にお話しをしていただこうと思います。渋谷先生は、文化人類学、移民研究が専門で、国際教養学部の国際労働移動論であるとか国際社会概論、ゼミなどもご担当されています。また、現代社会学部の多文化社会論もご担当されています。それでは、先生よろしくお願ひします。

渋谷：

今、ご紹介いただきました国際教養学部の渋谷です。よろしくお願ひします。私の専門は、今ご紹介いただきましたように文化人類学で、元々はフランスの移民問題を扱っていました。名古屋は、外国人が多いところでも有名な地域です。ですので、中京大学に来たのだからこの地域の状況も調べてみようと思い、名古屋近辺での調査を始めています。私のように現地調査がメインになる研究者は、その成果を授業で明らかにすることがあります。それだけではなく、学生にも少し調査的なものもやって欲しく、今日は、基本的には、ゼミで私がどんなことをやっているのかを説明させていただきます。

例えば、先生方の中で、講義系の科目をされている方は多いと思いますが、最初の太田先生の話でもありましたが、その研究成果が、授業の中で反映されるということはよくあることだと思います。私の場合でも、名古屋の港区九番団地で行った調査の結果であるとか、豊田市の保見団地、これは偶然なんですけれども、中京大学豊田キャンパスのすぐ隣にある団地で、そこは日本でも非常に有名なブラジル出身の人の集住地域だったわけですが、そこでの調査も行っています。これらの成果は、国際労働移動論などの授業にも反映させています。そういう意味で、授業と研究はリンクはしているんですが、これは多くの

先生方がされていることだと思います。私のところにこういうところで話をしろと来たのはおそらく別の情報をやってくれということだと思います、今ゼミでやっていることと研究との関わりについて話をさせていただきたいと思います。

ゼミは、国際教養テーマゼミの学生を中心に行っています。対象となる地域は、保見団地になります。保見団地での調査は昨年度から始めて今年度が2年目になります。この保見団地、先ほども言ったわけですが、日本でも非常に有名なブラジル出身者の集住地域でした。一時は、団地の住人の6割、7割がブラジル出身者と言われていた時代もありました。ただ皆さん御存知の通り、リーマンショック以降、少なくない人たちがブラジルに帰る、もしくは日本の別の地域に移住するということが生じました。保見団地というのは、外国人が多い地域ということで、移民研究者の中では非常に有名な地域でした。しかし実際に保見団地に行って調査してみると、分かってきたことがあります。それは何かというと、どこの団地でも現在よくあることなのかも知れませんが、少子化と高齢化が急速に進んでいるということです。この団地で学区になっている1つの小学校で、現在全校生徒が120名というところがあります。つまり、1学年単純計算で20名くらいで、20名1クラスが1学年ずつしかないと学校になっています。このことから分かるように、少子化が非常に進んでいる。団地を歩いていると、高齢者の方が割と多いのが目に付くような地域になっています。また、もう1つの大きな問題が、空き部屋問題です。保見団地に行かれた方は分かると思うんですが、駅からもちょっと遠いです。保見駅から歩いて20分から30分くらいかかります。スーパーに行こうと思うと、団地の中にフォックスマートというスーパーが1店あるだけで、なかなか生活しにくい事情もあり、空き部屋が非常に多くなっています。そういう意味で、単なる外国人集住地域ではなく、いわゆるニュータウンなどの現在日本の団地が抱える少子高齢化問題が集まっている地域だということが分かってきました。

そこで、去年から私がやり始めたことは何かと言うと、このような外国人の問題、もしくは団地の現状の本などを読むことをやりつつ、現地の保見団地のNPOの人と私が関わりを持つようになっていきますので、その人達と月に1回程度、打ち合わせとして、NPOの団地の住民とちょっとした勉強会を始めています。そして、このゼミで何をしようとしているかということ、移民問題と先ほど言いましたが——私は都市部限界コミュニティと呼んでいます——つまり少子高齢化と空き部屋問題、そして自治会がうまく機能しなくなっているといった都市部限界コミュニティの典型例として、保見団地の置かれている状況を文献調査と現地の人達のインタビューを通して学生に知ってもらうことがテーマになっています。

それをやり始めたらNPOの人達から、せっかく隣に大学があるんだから、中京大学さんなんかやってくださいよと言われましたので、じゃあ学生が中心となって、何らかの改善策になるようなイベントを企画運営しようというのが、もう1つの方向性として浮かび上がってきました。先ほども言ったように、定期的に打ち合わせと称して、学生を連れて団地の人達と会う。そうすると結果的に、異なる世代の人達で、もちろん国籍も違う人たちも含まれていますので、文化的背景の異なる人々と一緒に何かを作っていく共同作業を学

生達は経験することになっています。これをちょっとした教育とつなぎ合わせて考えると、実は今、流行っている社会人基礎力というものを彼ら彼女達は習得していると思います。そうできれば儲けものだなというくらいですけれども、結果的にこういう経験を彼ら彼女たちはしていることとなります。昨年度からは、NPO団体が、豊田キャンパスから歩いて15分くらいの所に畑や田んぼを持ってお米作りをやっていたので、それを学生達が手伝っています。さらに学生が企画したものなのですが、外国にルーツを持つ子供達の高校進学とか大学進学の率が低い、それを高めるためにはどうしたらいいかのように、彼らは頑張ってくれました。1つのきっかけとして、大学に来て、こういう立派な建物があるんだとか、こんなグラウンドがあるんだということを知ってもらうのが、学習意欲、モチベーションを上げることになるんじゃないかと考えまして、保見団地及びその周辺に住んでいる子供達、特に中学生以上を中京大学の大学祭に招待するという活動を実施しました。その後、先ほどの田んぼの話ですが、脱穀を手伝ったら、NPOの方から餅つきをやるんだけれど、普通に餅つきをやっても人が来ないから、人が集まるイベントを考えてくださいという依頼がありました。つまり、国籍を越えて、保見団地地区のつながりを作る機会を提供するというのを課題として与えられたわけです。それで学生は頑張ってくれました。単に餅つきだけだと人はあまり来ないだろうということで、学生の知り合いでバルーンアートが出来る人がいたので、その人に来てもらってバルーンアートの教室をやったら、これが非常に成功し、団地住民が多く参加してくれる結果になりました。それが1つのきっかけになってNPOの方から、2014年、今年度はですね、1年間を通して授業とNPOの活動を連携させたものにしませんかと話がありました。私の方からも半分持ちかけたところがあるんですが、今年度は、米作りをしています。まず田植えをやりました。この写真には学生だけが写っていますが、もちろん団地の人達も参加しています。その後は7月に、保見に「おいでん祭」（豊田市がやっているおいでん祭の地区大会）その運営に関わったり、ブースを1つ作らせてもらって焼きそばを作り、それを販売することもやってみました。その後、秋になると稲刈り等を行いました。稲刈りまではですね、NPO団体の活動にのっかってのものですが、12月には学生が企画した「友活プロジェクト」を準備しています。保見地区は外国人も多いんだけど高齢者も増えてしまって、横のつながりが減ってきている。そういうことを団地の住民達との会話から理解した学生が、友達を作っていくようなネットワーク作りの機会が必要だろうと考え、そういう場を提供しようということで始めました。こういうチラシも作ってくれたのですが、何かの拍子で、うどんを作らしようよということになりまして、「うどん得太く長い付き合いを」というのをキャッチフレーズにして、国籍も世代も性別も越えたネットワークを作ってみようという実験的なものを企画しています。その1つの催し物として、9時45分から中京大生によるうどん作り実演をやります。学生さん達が妖怪ウォッチの体操なんかをやりながらうどんを作るらしいんですが、どうやったら出来るのか私は分かりません（笑）。多分、彼らがうまくやってくれると思います。そういう形で、来年度もしくは来年度以降も、地域の活動と授業とを連携させながら地域社会についての理解を深めていくことができればと思います。

このような活動が何につながってきたかという、例えば教育的な面で言うと、去年の学生なんです、地元のNPOとの関わりを1年間やってきた学生が今、外国人支援のNPOに関しての卒論を書いています。そういう意味で何らかの影響を学生達に与えることが出来たんじゃないかと思います。

研究に関してなんですが、学生達がNPOに関わる以前と以後と比べるとかなり違って、調査が非常にしやすくなったところがあります。ある意味、団地住民のより深い、これまでは聞けなかったような話が聞けるようになって、住民達が抱えている問題であるとか、人間関係等をより深く理解することが可能になってきたという研究上に対する効果もあるんじゃないかと思います。私の方からの報告はこれでおしまいとします。どうもありがとうございました。

司会：

どうもありがとうございました。大学に求められるものとして、研究・教育、そして最近では地域貢献とか社会貢献みたいなものもありますので、その3つがうまくリンクしたお話ではなかったかと思います。次は、野村昌司先生にご登壇いただいてお話を伺いたいと思います。野村先生は、言語学がご専門で、今年度は全学共通のメディア英語や英語資格対策といった授業をご担当されています。それでは、先生よろしくお願ひします。

野村：

国際教養学部の野村です。どうぞよろしくお願ひ致します。先のお二方のお話とはお話しする内容の方向性が少し異なるかも知れないということをお断りさせて頂きます。本日皆様にお伝えしたいことは次の2点です。現在、中京大学において私の研究と教育にはほとんど接点がないということ、そしてしかしながら国際教養学部という学部の特性を利用すれば、接点を持つことは可能かもしれないということ、この2点です。

では今日のお話の段取りを説明致します。まず最初に自分が研究している言語学についてお話しします。次に私が大学で行っている英語教育についてお話しし、特に具体的にどのような内容の授業かというよりも、どういった科目を担当しているかをお伝えします。そして私が研究対象としていることと教育の場で指南していることに直接的な繋がりが無いことを示します。それだけで終わってはつまらないので、自分が研究していることと教育にあまり接点が無くても、言語学と言う分野が英語教育に貢献出来ると思われる点について少しお話しをし、最後に、言語学に興味を持つ学生に自分が貢献出来ると思える教育環境を提案したいと思います。

まずは、私が研究している言語学についてです。言語学と言っても、様々な専門的分野があります。私の専門は「生成文法」という研究です。これは、1950年代後半にNoam Chomskyが提唱し始めた統語論(syntax)の研究の1つになります。この研究は人間の持つ言語能力を人間の生物学的特徴の一部と考えた、人類共通の言語能力に対する自然科学的なアプローチです。この分野は言語の形式的特性(文法)を扱う能力をその研究対象としています。言葉には音声や意味といった形式が関わっています。外国語学習において、語彙の

発音の仕方も意味もわかっているのに上手く使えないということがあります。それは音声と意味とをつなぐシステムをわかっていないことにほかなりません。もちろん音声と意味にも形式的特性がありますが、我々は、音声と意味とをつなぐシステム(syntax)を研究の対象としています。

次に生成文法の主たる研究目標が何かお話しします。例えば英語を勉強すると、英文法を学ばなければなりません。様々な言語にそれぞれ文法があるわけですが、それらの文法に異なっている部分があるというのは、自明の理だと思います。また日本語が分かるからといって、英語が使えるようにはならないわけですが、その背景には人間の言語能力というものが存在します。例えば、英語を話す環境で生まれ育てば、英語が使えるようになり、日本語を話す環境で生まれ育てば日本語が使えるようになります。たとえ両親がアメリカ人だったとしても、日本語を話す環境で生まれ育てば日本語が話せるようになるわけです。生成文法研究ではこれを可能にしているのが、人間の言語能力だと考え、その性質を解明することを主たる研究目標としています。

先ほど、英語の文法と日本語の文法は異なる部分を含んでいると言いましたが、その英語話者や日本語話者の頭の中にはそれぞれ異なる文法システムが入っていると考えています。我々はそれを個別文法と呼んでいます。しかし、言語能力は人間の生物学的特性の一部をなしていると考えため、基本的にどの個人も同じものをもって生まれてくると考えるのが妥当であるということから、普遍文法というものを提案し、人間にはそれが生得的にそなわっていると考えています。

この考え方をある程度明確にしてきたアプローチが、80年代から始まった原理とパラメータによるアプローチというものです。このアプローチは人類共通の言語能力（普遍文法）は不変の原理と言語ごとに異なる選択をおこなうことが可能なパラメータの2種類から成り立つという考え方です。この考え方が正しいとすると、もしくはこの考え方を元に考えると、人間の子供達が言語を獲得していくプロセスというのは、このパラメータの値を決定していくプロセスということになります。そうしますと、普遍文法というのは人間が共通して持っている言語能力の初期状態であり、個別文法というのは子供が言語を獲得していく中でパラメーターの値を決定して行き、すべての値が確定してできあがった状態ということになります。つまり普遍文法が言語能力の初期状態であるのに対して、個別文法は、その最終到達状態であると考えています。

生成文法の研究は人間の言語能力に対する自然科学的なアプローチで行われています。例えば、(言語)データの観察・分析に基づいて仮説を立て、それをさらなるデータの観察・分析によって検証・修正していく形をとります。生成文法の研究において重要なのは、その言語能力の初期状態(普遍文法)の性質の探求であり、個別文法は二次的な意味合いしか持ちません。それはどういうことかといいますと、例えば、私の場合、英語、日本語、アイスランド語と言った言語を対象に研究しているわけですが、それら個別言語のデータは普遍文法の理論の検証に関係はしてきますが、すべてデータの観察・分析による仮説の検証という範疇でひとくくりにはされるべきものであり、あくまでも生成文法の目標は普遍文法の性質の解明であって、個別文法を記述または説明することではないというこ

とです。よって、個別文法を記述または説明することが、我々の目標ではないということです。過去に、例えば、英語の文法というものがどういう文法なのかということ記述的に研究されてきた素晴らしい研究者達がいらっしゃいますが、その方々の研究と普遍文法の性質の解明を目指す我々の研究は異質の研究であるということです。

少し自分が行っている研究についてお話しします。私はSyntaxの研究をしています、特に節構造(clause architecture)と、格と一致(Case and agreement)について研究しています。前者はどのような風に文が構成されるのかという文を構成していく仕組みについての研究であり、後者は、例えば主語要素には主格、目的語要素には目的格といった名詞要素に現れる格というものがある特定の名詞要素と動詞要素との間に見られる一致現象に関する研究です。なぜ格と一致を研究しているかという、この仕組みがおそらく文を構成する何かきっかけになっていると考えているからです。私が特に日本語の研究において行っているのは、主格目的語(Nominative Object)という格についてです。例えばスライドの1の例「花子は数学 {が・?を} 分かる」のように、目的語要素に「が」格を許す文があります。これは「分かる」という動詞が状態動詞だからなのですが、これを、2の例「太郎は花子に数学 {*が・を} わからせた」のように使役動詞の中に入れると、「が」格を用いた文は非文となり、「を」格を用いた文が文法的な文となります。複雑になりますが、それを3の例「太郎は花子に数学 {が・を} わからせられる」のように、更に可能動詞の中に入れると、今度は「が」でも「を」でも良くなります。このように、日本語の複合動詞の中で、どのような風に格というものが変わるのか、といったことを研究しています。これは日本語特有の現象という訳ではなく、様々な言語を見ていくと、同様の格の交替というものが存在します。私の場合、母語である日本語の知識が使えるわけですので、こうした現象を主に日本語のデータを用いて研究しています。以上が言語学と言う学問がどのようなものなのかということと私の研究についての説明です。

次に、自分が大学で行っている英語教育についてお話しします。簡単に、自分がどういう英語科目を担当しているかをご紹介します。学部固有科目の英語としてはイングリッシュ・スタディーズという科目を担当しており、全学共通科目の英語ではメディア英語や英語資格対策という科目を担当しています。まず、イングリッシュ・スタディーズという科目でどういうことを行っているかと言いますと、スライドにありますように、例えばイングリッシュ・スタディーズⅡでは文化をその主題とし、History (Royal Family), People (Gender Equality), Customs (Culinary Tradition), Language (Different but commensurable)の4つのトピックを取り上げ、特にカッコ内に挙げた内容に関するリーディング、ディスカッション、エッセイ・ライティングを行っています。

メディア英語では、米国のテレビドラマ『FRIENDS』を題材に、日本語字幕では伝わらないアメリカンジョークを英語で理解する、ジョークの中に取り入れられている言語特有の性質に触れ、言葉の持つ不思議さ・面白さを感じ取れるようになることを目標として授業を行っています。先ほど明木先生からギャグのお話がありましたが、日本語訳や日本語字幕ではなく、英語だからこそ笑えるということがとてもたくさんあります。授業ではワーナー・ジャパンが出しているDVDを使っているのですが、実はそのDVDではカットさ

れているシーンが多く、日本語に訳し難い台詞のシーンもカットされていることがあります。授業では、US版の『FRIENDS』も紹介し、そういった日本語訳にするのは難しいが言葉の面白さがあるカットされたシーンにも触れています。この授業は主にリスニングの授業になっていますが、カッコ書きで書いた「コミュニケーション」力向上にも役立つ試みも行っています。その点については時間があれば後でお話ししたいと思います。

次に英語資格対策の授業についてです。現在、英語資格対策Ⅱを担当しています。この授業はTOEICを利用した英語学習になります。英語資格対策を担当し始めた頃は、いわゆるTOEIC学習というような授業をやってしまったと自分でも思っていますが、英語を大学で教えているうちに、なんだか間違った方向に日本の英語教育が進んでいると感じ始め、ある時これじゃあいけないと思い立ったのです。学生は、どうしても就活に必要なのでTOEIC、TOEICと言います。そのTOEICを逆に利用してまともな英語学習をしようというのがこの授業での今の試みです。どれくらい学生達に伝わっているかはよく分からないところがありますが、私の授業での学習はTOEICのスコアアップのための学習ではなく、英語についての知識を身につけるための学習であり、結果として、スコアが伸びるのだということを授業でも何度も言いつつ、それを少しでも実感できる工夫をしています。以上が、私が大学で行っている英語教育です。

さて大学における研究と教育の接点ということですが、私の研究は、普遍文法の性質を解明すること、これが自分の研究であり、私が行っている教育はというと、個別文法である英語についての知識を身につけさせ、その言語運用を指南することなので、大学における研究と教育に直接的なつながりはないというのが私の置かれている状況です。

では自分は何も貢献できないのか。次は言語学という分野が英語教育に貢献できると思われる点についてお話しします。貢献できる点としては、今の間違った日本の英語教育の進み方に対して我々言語学者がアドバイスできることがあるのではないかとということがあります。例えば、英語学習を母語を身につけると同じ手順で進めれば、母語のように英語を身につけることができると考えている輩が沢山いるので、それは間違いだということを言語学者の立場から言えると思います。このスライドの表は、慶應義塾大学名誉教授の大津由紀雄先生がよく使われている「ことばを身につける3つの形態」を示した表です。

ことばを身につける3つの形態

	母語の存在	日常的触れあいと必然性	開始時
母語	なし	あり	無意識的
第二言語	あり	あり	無意識的
外国語	あり	なし	意識的

まず母語に関してですが、母語を獲得する際、その背後に母語の存在はありません。最初にその言語を獲得するわけですので、母語の存在はありません。もちろんその言語と日常的な触れあいがあって、その言語を獲得しないと生きていくのに二進も三進もいかないわけですから、その必然性もあるといえます。また、母語獲得の開始時は、もちろん無意識的です。一方第二言語というのは、例えば、3歳くらいまで日本で生活をしていて、親

の転勤等によって英語圏に移住をし、英語を獲得して生きていけないといけない環境で獲得する英語のような母語以外の言語のことです。そうした時には、もちろん3歳まで日本で育っていれば、日本語が母語になっていますので、母語の存在があるわけです。しかしその中で生活をしていかなければならないということで、日常的触れあいと必然性というものが生まれています。日常的触れあいと必然性から母語への依存が高くないため、ある程度、無意識的にその言語の獲得が開始されます。特に、例えば、英語学校に入れられるだとか、そういったことがあった場合は、開始時が意識的ということが考えられるかもしれませんが、その世界で生活をしていかなけないといけないという状況がありますので、これは大抵の場合は無意識的に獲得していくといえると思います。それに対して、例えば日本で我々が英語を学習してきたように中学校から英語を勉強する外国語学習の場合は、もちろん母語の存在があり、どう考えても日常的な触れ合い、必然性というものがありません。また開始時についても、その外国語を学ぶという形から始めますので、意識的であるということが分かっています。この表から見て、第二言語と外国語の共通点というのは、母語の存在があるということだけで、その言語を獲得する、習得する(学習する)という点では、かなり異質なものであるということが分かります。しかし、今の文科省もそうですが、国をあげた英語教育の方向性が、この第二言語と外国語の獲得と習得(学習)を混同したもののなのです。そもそも外国語学習と第二言語獲得のプロセスは異なります。それにも関わらず第二言語獲得を模倣した外国語教育が推し進められているのです。これは、普通に考えてもらえれば分かることだと思います。たかだか週5時間程度の英語の授業時間に、どんなに英語を聞かせても、第二言語として獲得される英語とは、質はもちろん、比べようもないくらい量的に差があるのです。よって母語を無視して英語を無意識的に身につけることは極めて困難だと言えます。この話をすれば本来は分かるはずなのですが、分かっていないお偉い方々が沢山いらっしゃるということです。我々言語学者は、言語学の世界では当たり前のことである「母語・第二言語の獲得と外国語学習はその習得のプロセスに違いがある」ということを世間に広く認知させることで、今の間違った英語教育に歯止めをかけなければなりません。これが言語学が英語教育に貢献できる点の1つと考えます。

さらに自分が研究している生成文法を少し理解してもらえれば、言葉は音声と意味をつなぐシステムが頭に入っていないと上手く使えないということが分かり、外国語教育にも役立てられるのではないかと考えます。冒頭でも述べましたが、例えば、外国語を学習する上でも、単語をよく知っている、単語の意味もよく分かっている、けれども英語を上手く使えないということがあります。どういうことなのかというと、そのシステム、英語のいわゆる個別文法がしっかり理解できていないから使えないということなのです。つまり英語学習者は、意識的に英語についての知識を身につければならないということです。これも先ほどスライドに書いた通りなのですが、世間は無意識的に楽に英語が学べるとても思っている感じがします。それも、いやそうではないのだということが言語学を学べば分かるのではないかと思います。母語である日本語の知識があるわけなので、それを利用すれば英語学習に役立つことも分かるのではないかと思います。先ほど言いました通り、自分が現在行っている研究は直接的に上手く役立てられるわけではありませんが、言語学

の知識があることは英語学習に何かしら役立つのではないかと思います。

最後に、言語学に興味を持つ学生に自分が貢献できるであろう教育環境についてお話しします。その教育環境は、ゼミの完全自由化で得られると考えます。現在、国際教養学部では毎年、ゼミを10クラス開講しています。語学系ゼミでは、教員の専門を研究するというゼミがほとんどありません。たとえば、フランス語のゼミをとった、スペイン語のゼミをとったとなると、それがフランス語やスペイン語に関連していれば、どんなことを勉強しても研究しても構いませんよという形でゼミが行われています。その先生方も必ず専門をお持ちなのだけれども、その専門教育をやるような感じではほとんどありません。国際教養学部の教員は現在68名おり、その研究も様々なわけですので、多様な研究機会があると言えます。では、その機会を活かすにはどうしたらいいでしょうか。様々な問題があるとは思いますが、理想的な話をすれば、ゼミの定員を5名前後に抑え、ゼミ開講を希望する教員は、希望する学生がいればゼミを開くという形が考えられます。例えば、3年4年、もしくは、2年3年4年という形で、持ち上がって行って毎年それを繰り返していく。そうすると、毎学期10名もしくは最大15名くらいのゼミ生を抱えている状態が続く形にでき、ゼミの中で縦の繋がりが作れます。そういう形でゼミができれば、自分が研究する言語学という学問を大学で専門的に教えることも可能となり、言語学者を育成できるということはもちろん、ことばに興味を持つ人、英語教師になろうと思っている人、学部生・中京大学生以外にも門戸を開き、自分が持っている知見を継続的に伝えていくことができると考えます。先ほども言いましたように、言語学の研究は自然科学的なアプローチをとるので、論理構成をきちんと整え、自分の仮説が妥当であるということを示していく必要があります。よって言語学を学べば、自分の考えを人に上手く伝える術が身につくはずで、そういう意味でも貢献出来るのではないかと考えます。自分が得られる効果としては、共に考える学生がいることで、自分の研究意欲も教育意欲も今以上に高められるという点が挙げられます。このように、ゼミの自由化には様々な利点があると思います。また、国際教養学部だからこそできることもあると思います。それは、紹介の中にもありましたが、元々国際教養学部と言うのは教養部だったわけですので、多くは全学共通科目を担当する教員で構成されています。従って、他の学部では学べない研究をしている教員も多々おりますし、一般教養レベルでの教育もできれば、そこを足かがりにより専門的教育も可能なわけです。学生の興味関心も、多種多様であるはずなので、68名の専門家の知識を使わない手はないのではないかとというのが、私の考えです。

以上が私からの話です。今日皆さんにお伝えしたかったことは、私の研究と教育にはほとんど接点がないということと、国際教養学部という学部の特性を利用すれば、接点を持つことも可能ではないかということでした。ご清聴ありがとうございました。

司会：

ありがとうございました。接点はないということでしたが、国際教養学部に対するご提案もありましたので、これについても意見交換ができたらいいなと思っています。それで

は、最後にお話いただきますのは、工学部メディア工学科の瀧剛志先生です。ご専門は、知能情報学という分野で、映像情報と可視化についてご研究されています。工学部で、ICTを応用したメディア技術に関する科目やプログラミング、映像処理に関する科目をご担当されています。また、本学のFD委員でもいらっしゃいます。それでは、瀧先生よろしくお願いたします。

瀧：

ご紹介ありがとうございます。皆さん、多分初めましてと言う方が多いと思いますが、工学部のメディア工学科に所属しております瀧と申します。御存知の通り、工学部は4学科ありまして、私のいるメディア工学科は豊田の方になります。今日は、研究と教育ということでこのような機会をいただきまして誠にありがとうございます。まず、研究の背景ですが、私自身は元々、中京大学の情報科学部の一期生としてやってまいりまして、昔、酒井先生の英語の授業も受けたような記憶があります（笑）。それからですね、大学は情報科学をずっと学んできたんですが、高校まではどちらかというと、勉強というよりはスポーツですね、サッカーをひたすらやって来たということで、これを見ていただいても分かるんですが、学会も情報系とスポーツ系ということでやっております。皆さん色々と研究のお話をされていまして、私も授業の話をする前に、少し研究の紹介をさせていただければと思います。ご紹介いただいたように、基本的には映像処理ということで、画像とか写真とかビデオから、映っているものが何なのかといったことを自動的に見つけたり、実際には目に見えないようなものを可視化する、見えるような形にするといったことをメインでやっております。一部ご紹介しますと、例えばこれはですね、コンピュータ制御でカメラのパン・チルトを自動制御できるカメラでして、ちょっと皆さんの所からは分かりづらいかも知れませんが、今ここに水色のぬいぐるみを動かしているんですけども、これをコンピュータ画像処理で自動的に見つけまして、それが動くとそれに追従して撮影をする。こういったようなことを研究の1つとしてやっております。この応用例の1つとしまして、実際に今のようなことを研究しているわけですが、12月くらいにテレビで放映していただきました。先ほどのカメラが豊田学舎にありますフィギュアスケートのアイスリンクに置いてありまして、選手が滑るとその選手を自動的にコンピュータとカメラで追従撮影をする。フィギュアスケートなどを見ますと、大体コーチであったり、選手のお母さん方が一生懸命ビデオを持って映像を撮影しているわけですが、なかなかそういった作業は大変になります。そういった作業を、こういった技術を使って自動化する。選手が来て、なにかボタンを押しますと、自動的に追従撮影が始まって、選手が帰る時には、自分が映った映像を持ち帰ることができる。そういった様なことをしております。そういったこともありまして、実はこの2月に開催されたソチオリンピックに北川学長らと一緒に、フィギュアスケートの応援に行きまして。そういったような研究をやっているんですけども、今私が担当している学部の科目というのはこのような形になっております。見ていただいて分かるかと思いますが、ちょうどこの赤文字の部分のゼミという形で、実は、工学部、特にメディア工学科の方は、2年の秋学期からゼミの配属

というのが行われます。現在、2年生が7名、3年生が11名、4年生が9名ということで、ゼミ活動をしております。実際にはですね、2年生は入ってきたばかりだということで、基本的な勉強を2年生だけでやっておりますけれども、3、4年生の方は一緒になって検定試験の勉強をしたり、それから研究活動をしたりという形で進めております。そのゼミのメンバーですけれども、現在、修士の学生が1名おりまして、あとは学部生ですね、4年生3年生2年生といて、このような人数になっております。昨年などは修士の学生がもう少しいたりとか、それから、留学生で研究生となって勉強しに来た子がいたりとか。大体、毎年このような人数で、ゼミの活動をしております。具体的にゼミの活動としては、スライドに示したようなことをしております。やはり、研究ということなので、最終的な目的は論文を書く、論文を投稿する、学会発表するといったこと。その他に、研究とは少し違いますが、キャリアをしっかりとつけるという意味で資格取得に関する勉強会をしたり、各種イベント、オープンキャンパスとか自治体それから学会等のイベントに出展するというようなことを目標に掲げてやっております。そのために、スライドの下の方に書いてありますけれども、ゼミは、火曜日の午後によっておりますけれども、研究となると3限4限っていうだけでは、到底時間が足りません。そこで、学生がどう思っているのかわからないんですが、授業がない時間帯、実際には金曜日の午後ですが、研究ディスカッションというのを開いております、授業が空いてればこちらの方に参加しなさいということでゼミ活動を進めております。その他、ゼミ合宿を夏冬の2回行ったり、上にもありましたけれども展示会、出展側ではなくても、そういったイベントに参加して情報収集する機会を増やしたり、近くで開催されるような学会等にも積極的に参加するように指導しております。また、懇親会ということで、機会があれば学生と食べて飲んでということも積極的にやっております。

研究活動に関してですけれども、一応今年度、学会発表したことを抜粋すると、このような形になります。特に御覧いただきたいのは、ちょっと下の方で見えにくいかもしれませんがオレンジ色で書かれた名前のは学部生、それから緑色が大学院生ということで、実際には、教員と学生が一体になって共同研究という形で研究を進めています。こちらとしても、なるべく発表は、学生達に積極的に行ってもらおうということで、大体ファーストオーサーというのは学生というケースが多くなっております。これは、私だけということではなくて、基本的に工学部の研究室というのはこういった形ですね。学生に発表させて、研究イコール一種の教育という形で進めております。

これは大学の公式ページに掲載されているものですが、9月の8、9日とこちらの名古屋のキャンパスで、電気電子情報関係の東海支部大会が開催されました。その中で、本学から、ここにありますが、学生が43人、発表をしました。おそらく、他の研究分野の状況というのはよくわからないんですが、基本的に情報工学系というのは、学会発表する機会が、多分皆様方が所属している学会よりも多いんじゃないかなと考えております。そういう中で、先ほどもお話ししましたが、学生に発表させるということが、教育としても、それから研究としても大事だという考えで色々行っております。最後に、この表にまとめてきましたけれども、先ほど野村先生が、研究と教育の接点がないという

お話をされましたけれども、我々の分野ではむしろ接点がない所を探す方が難しい。常に、研究と教育が、ほぼ一体で進んでいるようなそういった印象を持っております。実際に、学会発表という流れで見えますと、研究・開発段階においては、まず、教員は、学生の研究テーマに対して、関連情報を収集したり、利用できそうな手法やアルゴリズムを提示したりといったような形で研究指導を行います。それから、パソコンとかカメラとかいった研究設備を調えるというようなこともします。学生は、そういったテーマに沿って関連研究を調査する、コンピュータでプログラムを作る、システムを作る。そして作ったもので、実際に実験をして結果を考察する。その成果を、先ほどの研究ディスカッション等で報告をしてもらい、そこで色々とお互いに意見交換をするというようなことをしています。そういう中で、なかなか面白い成果が出たなということであれば、積極的に関連する学会で発表しようということ、発表の準備に取りかかります。当然、発表準備ということで、学生は発表用の原稿や発表のスライド等を作ります。時には、日本国内ではなく、海外で、英語で発表するといった様なこともちょくちょく行っております。最終的に、学会発表の段階では、教員の役割というのは、それまでに終わってしまっていて、後は引率をして、他の研究者と情報交換をしたり、それから色々な資料を収集したり、というようなことがメインとなります。学生は、そこで実際に発表して、色々な研究者から質問を受けてそれに答えるといった活動になります。こういった中で、実際に我々にとっては研究発表したということで、それも、学生に発表させたということで1つの教育それから研究の実績となります。一方、学生から見ると、おそらく学生がやっている研究、これが将来就職して役立つということはほとんどないと思います。ただし、こういうプロセスを経て、実際に目標である発表という所までにたどり着いたと言うことで、学生自身は達成感とか自信、それから今後の研究に対するモチベーションのアップといったことに大いに繋がっているんじゃないかなと感じております。一応、そういった形で、私の方は、学生と一体になって、教育イコール研究という形で進めております。この後、色々皆さんと意見交換できればと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。どうも、ありがとうございました。

司会：

ありがとうございました。4人の先生から沢山の話題を提供していただきました。想定より少し短い時間になってしまいましたけれども、質疑応答と意見交換をしたいと思います。なるべく多くの先生方からご質問やご意見をいただければと思いますので、できるだけ簡潔にお願いできればと思います。それでは、質問ご意見のある先生がいらっしゃれば、ぜひお願いしたいと思います。では、梅先生、お願いします。

梅：

国際教養学部の英語教えます梅と申します。こういう話は、懇親会の方が出るのかも知れませんが、この時間を少し拝借致します。今、伺っております、瀧先生のご発表、これはかなり教育内容と研究内容が一致しているという、ただし就職の時には何も役

に立たないと、最後ちょっと難しいところもありました。それから、野村先生は最初から切り離しているというところでした。非常に面白いコントラストと思いました。明木先生と渋谷先生の場合は、かなり上手くいっているという話のようにも聞こえましたが、今日のテーマという、何とかと何とかの接点ということはですね、さっき学部長が挨拶されたようにかなり生々しい話かという風に期待して、より国際教養学部、あるいは全学的にもそういう話に入っていけるのかなと期待したのですが、割と大人の路線でした。明木先生と渋谷先生は、今の国際教養学部の体制のままで、十分自己実現されているとそういうご判断なのか、それとも、もうちょっといけるというご判断なのかお聞かせください。質問が奇異でしたら、それは違うよ、と仰っていただだけで結構です。

司会：

明木先生、いかがでしょうか。

明木：

今のやり方で完全だとは思っていませんが、学生の指導をしながら、私も勉強になっていることはあると思います。さらにどうすればよいのかも模索中です。

渋谷：

今回は、教養テーマゼミの学生が対象の授業の話をしたんですが、演習の学生といっしょにやろうと思ったのです。やろうと思ったのですが、やめました。それは何故かという、まず1つが人数が多い。17~18人いましたので、その全員分を面倒見るのは無理だろうと判断しました。しかも、外部に出すわけですから、その面倒を見るのは難しいだろうということがありました。そういう意味でお手頃の人数だったのが教養テーマゼミでした。それでも、やはり問題があったんです。それは何かというと、お金なんです。つまり、交通費がかかるわけですね。交通費がかかって、それをどうするかというのが1つの問題になりましたので、今年度からは八事キャンパスではなく豊田キャンパスでテーマゼミを開講することにしました。そうするともう定期が通ってますから、学生達は交通費の心配はなくなった。そういう意味で、試行錯誤でですね。やり方を変えながら、どれが一番ベストなのかという形で、2年目を迎えているということです。

司会：

ありがとうございました。他に皆さん、ご意見あるいはご質問、あるいは野村先生のご提案に関する議論でも。ニーナ先生、お願いします。

ニーナ：

お言葉に甘えて。私、ロシア語を担当しているニーナと申しますが、野村先生が、理想を述べられまして、その理想が実現するには、何が必要か、何か考えを持っていらっしゃるのでしょうか。というのは、5人ずつのゼミだと教室が足りるんですか？ そのよう

な、何か、理想だけの話もごもっともですけれども、その理想と現実はどこで合わせるのでしょうか。

野村：

まず、その理想すら掲げていない状況がずっと続いていて、そんな無理だよというように終わらせているケースがほとんどだと思います。特に、国際教養学部は、先ほども少しお話した通り、教養部から始まっており、そもそも学部化したこと自体が非常に難しいことをやったと思っています。例えば、自分も、英語を教えています、自分の専門知識を教えるという職で採用されたわけでもありません。ところが学部化したことで、学生を育てたいという気持ちは出てきました。しかしそれを実行することもできません。教養部時代のままであれば、英語を一般教養科目として教えていれば良いだけでしたし、今の学部のように学生達を持ち上がりながら、育てていくということが一切なかったわけです。だから、そういう気持ちも持たないで、完全に切り離して、研究は自分の研究として行い、他の大学に行って、他の大学院生と関わりながら、その人達を育てられれば良いというように思っていました。しかし学部化したことによって、色々と話が変わってきたということがあります。確かに私の理想が実現可能かという難しい問題があると思います。けれども、大学に働きかけていけない限り何も動きませんし、まずこれが理想なんだということを作っていくかといけないと思います。それは例えばNEXT10のようなところであっても、同じだと思うのです。そこで落とし所を見つけていくことをしない限り、変化は生まれません。例えば、ゼミ生の数が7名になるということがあるかもしれないですし、例えば、5名だったら、自分の研究室でやれるんじゃないかなということもあるかもしれません。先ほど、瀧先生のお話にもありましたけれども、授業外で活動をやっていくとか、そういった形で教育を進めていければ、それこそ本場のゼミの形になるのではないかなと思っています。また、学年を混ぜるということも実際には可能なのではないかなとも思っています。

司会：

ありがとうございました。もう少し時間がありますので、1つか2つ。では、長瀧先生お願いします。

長瀧：

皆さん、ありがとうございました。国際教養学部の長瀧です。せっかく工学部から瀧先生にお話しただいておりますので、質問をさせていただきます。お話をうかがうと、非常に理想的な形で教育研究が進んでいるという印象を受けました。僕は、実はこのメンバーに関して酒井先生からお話を伺ったさい、自然科学系の人をお願いしたらどうかと申し上げたんですね。国際教養学部の自然科学系の先生をイメージしておりました。工学部の瀧先生がこういうお話をされるのはある程度予測がついて、研究と教育のバランスが非常に上手くとれていると思いました。学生と大学院生とかと一体にならなきゃ研究が進んでいか

ないですね。心理学部なんかも似ていると思います。今、理想的な形で進んでいるように見える研究ですけれども、最後には将来就職したら、あまり役に立たないかもしれないと仰られていました。そこで質問ですが、中京大学の工学部の学生さんが大学院だとかドクターとかに進学して、例えば、アカデミックポストとか企業の研究所とかで活躍するような人材へと育てているのでしょうか。瀧先生は、理系学部の第一期生だと伺ったんですが、現在はどんな感じなのか教えていただけますか。

瀧：

長滝先生、どうもありがとうございました。まず、先ほど役に立たないと言いましたけれども、例えば、先ほどお見せできませんでした。フィギュアスケートの研究をやっていると言った時に、多分就職してフィギュアスケートの関連に就くことはない、そういった意味で役に立たないというお話をしたんです。けれども当然、研究をやる上でのプロセスというのか、例えば、コンピュータでプログラムを作るためのプログラミング能力であったり、色んな文献を調査する能力というのは、これはテーマが違うだけで、やり方っていうのは大体同じようなことだと思います。色んな問題にぶち当たった時に、それを解決する、そういうこと自体はしっかりと磨かれているんじゃないかと思っています。それから、実際に、私を含めてですけれども、情報科学部時代から含めて、おそらく10人くらいは博士の学位を取ってどこかで教員として働いています。私の同期も、岐阜大工学部にいたりとか、後輩も静岡大学とか早稲田とか、一時、東大にも行った学生がおります。そういった意味では、コンスタントっていうのはなかなか難しいんですけれども、その学年で1人、もしくはもっと少ないかもしれませんが、そういう人材が育てられているんじゃないかと思っています。それから、私が最近、私のゼミで見てきた学生でいうと、東大、京大、名大とか、なかなかそういった所と正直太刀打ちができない。開発という意味では、能力的には厳しいなというのはあるんです。けれども、中には、非常に秀でた学生もおります。最近ですと、キャノンの医療関係の開発部隊に入るとか。長谷川ゼミで医療画像の研究をしてそのまま研究が職業になったという学生も実際にはおります。そう言った状況になります。

長滝：

どうもありがとうございました。素晴らしい成果だと思います。

司会：

ありがとうございました。ちょうど時間になりました。この後ですね、話題提供してくださった先生方、委員の先生方との懇親会の席を設けておりますので、フロアにいらっしゃる先生もご都合のつくようであれば、ぜひご参加ください。今日は4人の先生方に、貴重な体験あるいは状況をお伺いすることができました。ヒントになったり、考えさせられたといったこともあったかと思っています。最後に、もう一度、話題を提供していただきました4人の先生方に拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございました。それでは、今年度の研究交流会をこれで終わりにしたいと思います。お疲れ様でした。

